

本年4月にラスベガスで開催されたフローアナリシスに関する国際学会には、日本からも多数参加されたが(詳細は本水 昌二, 本誌5巻1号を参照), その Proceedings が発刊された。44編の論文が収載されている(日本関係11編)。3年毎に開催されているこのシリーズのシンポジウムの成果は、下記のように Analytica Chimica Acta の特集号として初回から発刊されている。

|                         |            |
|-------------------------|------------|
| 1回(1979, アムステルダム, オランダ) | 114巻(1980) |
| 2回(1982, ルンド, スウェーデン)   | 145巻(1983) |
| 3回(1985, バーミンガム, 英)     | 179巻(1986) |
| 4回(1988, ラスベガス, 米)      | 214巻(1988) |
| 5回(1991, 熊本, 日本)        | -----      |

できたての先駆的研究成果を示したオリジナル論文や研究のトレンドを解析し予測した総説が含まれている。全体的な寸評は困難であるが、過去の特集の内容と比較すると、固定化酵素, 抽出装置, 拡散膜, イオン交換カラム等を装着したオンライン高機能化の傾向が強くなり, 隣接分野との接触が高まりつつある。他方, 研究分野が多角的に複雑化するにつれて, 概念がつかみにくい用語が多くなり, 混乱しつつあるのは残念である。FIAの教育過程への導入や公定分析法での実用段階に入っているので, 共通概念をもつ用語の調整も先決課題であろう(用語の問題については<編集後記>をご参照下さい)。

今回の特集記事の一つとして, Tyson らによる原子吸光や原子発光(ICP)とFIAのコンビネーションに関する総説がある。FIAの導入によりサンプルの前濃縮, 化学干渉やマトリックス効果の抑制, 標準添加法などがオンラインで可能になり, 日常的にも広く利用されるようになっていく。他方, 感度や精度に大きく影響するサンプル導入法(流速やネブライザー周辺装置のデザイン)に関するデータについては, 研究者間に大きな不一致がみられるが, 整合するための建設的提言がなされている。

#### <文献>

J. F. Tyson, Anal. Chim. Acta, 214, 57(1988)

C. E. Adeeyinwo and J. F. Tyson, Anal. Chim. Acta, 214, 339(1988)